

夢 と 夢 ^(※1)高普第 10 回卒 大内 勇夫 ^(※2)

仙台空港から、2時間弱で、北海道の土を踏めるのに、寒くて、雪が多い冬の印象が強力なためかもしれないが、生活環境としての北海道のイメージは、普遍的ではない。

こんな北海道にも、多くの同窓生が活躍しているが、広大な土地ゆえに、集い寄りて、思い出を語り、親交をあたためるチャンスは少ない。現水谷 ^(※3) 支部長は、このことに心をくだかれ、数年毎に会を催してくれる。ほとんど同じ出席者であるが、結構、相馬の思い出話に花が咲く。

相高の門を潜ったのは、昭和 30 年の春で、飯豊中学校からの入学であった。圧倒的多数で、中学の延長みたいに振舞っていた中村一中卒に対し、驚きと妬みと良い意味でファイトを沸かしたことも懐かしい。そんなことで、友達は、ほとんど、在の田舎者ばかり、集まって、勉強に励んだのは、せめてもの抵抗だったのかもしれない。

入学時の担任は鈴木琢磨 ^(※4) 先生、卒業時は中川正二 ^(※5) 先生で、特に中川先生には、いろいろとお世話になった。

2 年生の夏休み、社会科担当の松岡重信 ^(※6) 先生の宿題はレポートであった。(題は自由)

飯豊の田舎で生活してたから「農村の実態」という調査を提出したところ、大変なおほめをいただいた。(中身はたいしたものでない) このおほめが、自分は将来、農業に係る仕事をしたいと言う「夢」に繋がり、以来 40 年、その道を歩んでいる。

今、日本の農業は、国際化と言う嵐の中で、右往左往しており、行末は決して、明るいものではない。しかし、40 年前「夢」を与えてくれた農業が、衰退し、工業化の犠牲に甘んじていることは堪え難く、残された人生も、「夢」と一緒にと念じている。

砂利のでこぼこ磯部街道も、通学路であったが、雨降り、冬の西風等、あまり楽しい思い出はない。

ただ、在学中に鉄筋三階建に改築された学び舎で、多くの特色ある先生方から、独特の指導を受け、少なからぬ影響をいただいたことが、「夢」を抱き続ける糧となったことは明白である。人生の「夢」を与えてくれたことに感謝するとともに、ともすれば、経済優先の社会で、母校・相高を通して、人間性が養われ、加えて、「夢」が描かれることを、大いに期待したい。

更に、相馬市の基盤は農業である。これに携わる人々が、胸をはって、相馬で農業を営めるよう遠い北海道から、エールを送りたい。

(※1) 創立百周年記念誌『相中相高百年史』(1998(平成 10)年 7 月 6 日発行) 第四部「思い出の記」より

(※2) 昭和 33 (1958) 年卒、飯豊出身。

(※3) 水谷正憲。中 31 回 昭和 8 (1933) 年卒、北海道出身。

(※4) 中 39 回 昭和 16 (1941) 年卒、大田出身。相高教諭(美術)：昭和 23～32 年。

(※5) 相高教諭(社会)：昭和 23～42 年。

(※6) 中 38 回 昭和 15 (1940) 年卒、中村出身。相高教諭(社会)：昭和 25～42 年。